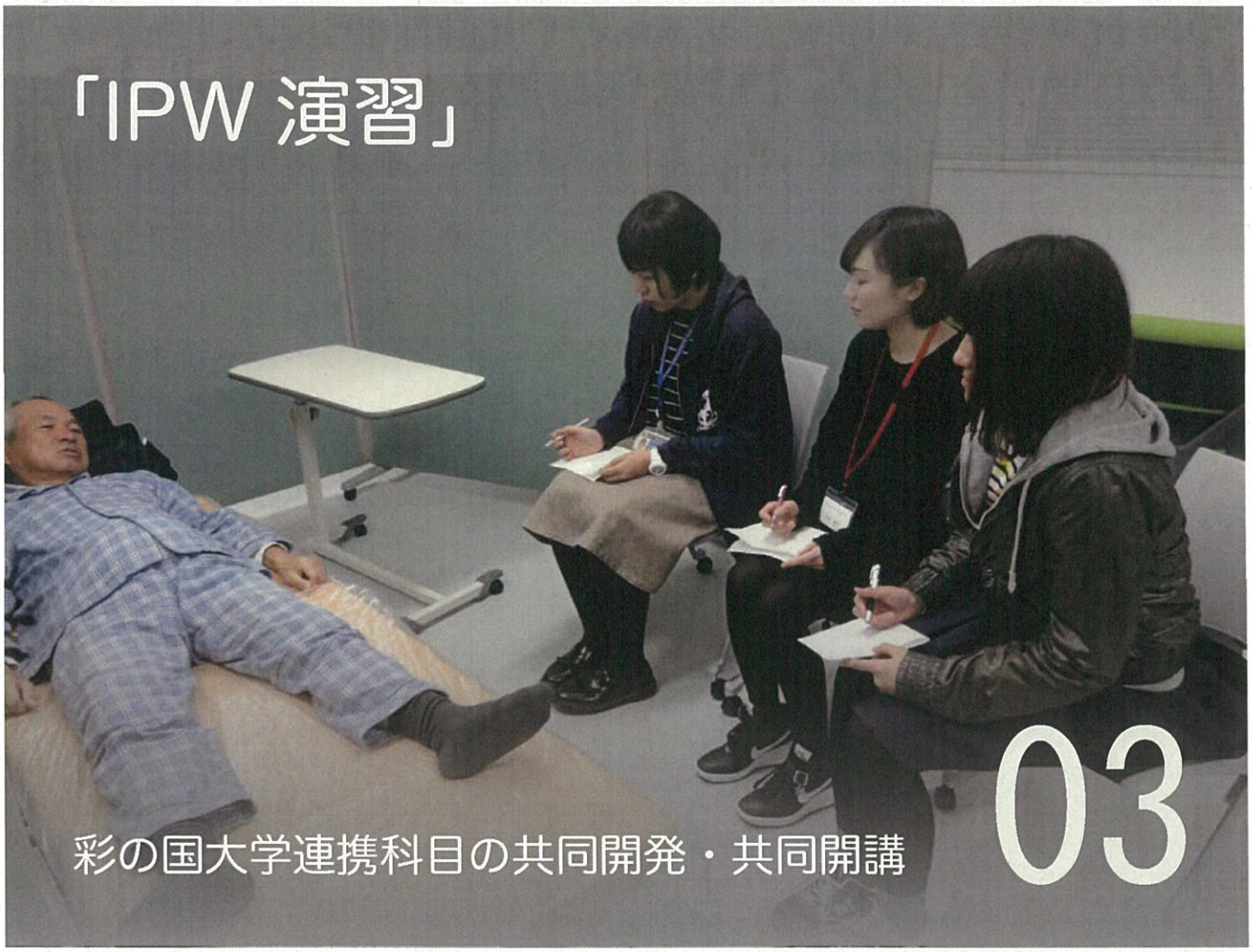


「IPW 演習」

彩の国大学連携科目の共同開発・共同開講 03

IPW 演習はヒューマンケア論、ヒューマンケア体験実習および IPW 論からなる共通基盤 IPE を基礎とし、チーム形成、グループワークおよびマネジメントの模擬的実践を行う演習である。４大学の学生を対象として、城西大学薬学部の「緩和医療学」の授業枠を利用した試行を実施した。

○ 平成 25 年度　試行

・実習日　平成 26 年１ 月17日（金）

・学生参加者　埼玉医科大学 29 名、城西大学 薬学部 薬学科 32 名

○ 平成 26 年度　試行

・実習日　平成 27 年１ 月１６日（金）

・学生参加者　埼玉県立大学理学療法学科 42 名、
埼玉医科大学 17 名、
日本工業大学生活環境デザイン学科２名、
城西大学 32 名（薬科学科:１名、薬学科:20 名、医療栄養学科:11 名）

(3) IPW 演習

IPW 演習はヒューマンケア論、ヒューマンケア体験実習および IPW 論からなる共通基盤 IPE を基礎とし、4 大学が合同で実施する演習であり、チーム形成、グループワークおよびマネジメントの模擬的実践を目的とした演習として位置づけられている。平成 25 年度より城西大学薬学部の後期選択科目「緩和医療学」の授業枠を利用して IPW 演習の試行を実施した。

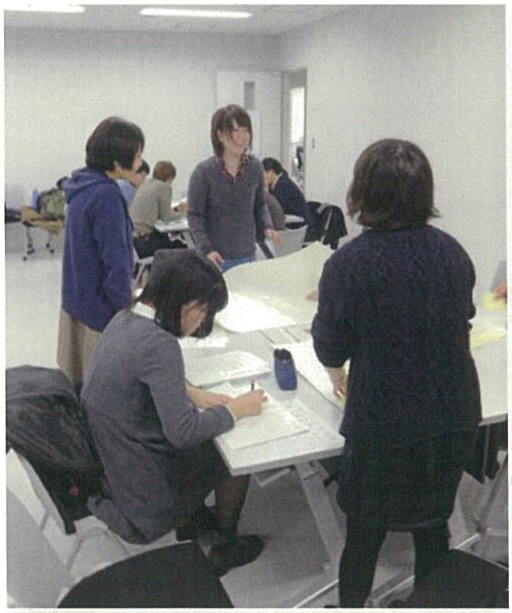
平成 25 年度 IPW 演習の参加者は、「緩和医療学」の薬学部の学生に加え、城西大学から地理的に近い埼玉医科大学医学部の学生が参加した。演習は学部内公開授業とし、IPE に興味を抱く教員や学生の見学を広く受け入れ、教職員および学生への啓発も兼ねる授業とした。また、埼玉医科大学附属病院は予てより城西大学薬学部の学生実習を受け入れており臨床での連携実績を有することから、学部における連携教育についてもその可能性と問題点を見出すのに最適と判断し、先ずはこの 2 大学で IPW 演習を実施することとした。演習の題材となる症例は予め城西大学で導入している e-ラーニングシステム（WebClass）にアップし、演習前に両大学の学生達が自由に閲覧できる環境を整え、当日までにその症例について当該疾患の治療法や使用薬剤について学習しておくよう指示した。演習当日、1 グループ 6〜7 名の医学生と薬学生の混成チームを形成した。これらのチームによるグループワークでは、がん終末期の症例（模擬症例）について「患者の退院希望に応じるべきか否か!?」との問題に対し、グループごとに退院の是非に分かれ、患者およびその家族に対するケアプランを作成した。学生達はそれぞれの専門性を活かし、客観的な医療情報を整理・分析し、さらに患者や家族の思いを考慮した熱いディスカッションを繰り広げた。各グループにはファシリテータとして 4 大学の教員 8 名と地域の在宅専門医 1 名（城西大学薬学部非常勤講師）をそれぞれ配置し、学生達のディスカッションをサポートした。演習終了後のアンケートでは「薬のことだけではなく、患者やその家族の背景についてまで考えることの深さを知りました。」「医学部のアプローチの仕方を体感することができた。（中略）学生同士だったのでお互いの壁のようなものはなかったと思う。」「他学部生との合同演習により、視野が広がり、単一学部生同士とは違った視点で物事をみる重要性を感じました。」「普段の授業からは得ることのできない視点であったり、考え方を学ぶことができ、とても有意義なものでした。」「医学部生は幅広い知識を持っていることを感じた。」など多くの意見が聞かれた。このグループワークを通じてチーム形成に必要な「多領域の相互理解」や「患者や地域の理解と課題解決の検討」がなされたことは、IPW 実習の模擬的実践としての IPW 演習の可能性を示す結果となった。しかし、その一方で「ディスカッションの時間が短い」や「もっと時間をかけて話し合いたかった」などの意見も聞かれ、次回の課題も明らかとなった。

平成26年度のIPW演習では、埼玉県立大学理学療法学科と日本工業大学生活環境デザイン学科の学生も加わり連携4大学の学生が参加し、前年度同様「緩和医療学」の授業の一部として実施した。症例は患者の背景や希望が異なる3症例を用意した。さらに、より高度なIPW実習の模擬的実践を目指し、3症例それぞれに模擬患者を導入した。このことで学生達は患者へのインタビューが可能となり、より臨場感のあるIPW演習を実施することができた。各グループとも4大学の学生がそれぞれの専門性を発揮し、前年度の医学、薬学の観点だけでなく、理学療法や住まい（工学）の視点が加わることで、より臨床現場に近いチーム医療を体験することができた。学生からは「医学部、薬学部（薬学科、管理栄養科）、そして私たち理学療法、と複数の学部の学生により患者さんの治療プランを考えることができ、大変勉強になりました。」や「他学部の学生さんが普段どんな勉強をし、同じ一人の患者さんやそのご家族に対して、どのように感じるかなど、かなり活発に討論することができ、とても勉強になりました。」さらに「自分の知識量の不足や視野の狭さを実感しました。」など多くの意見が寄せられた。また、グループワークをサポートした教員からは、それぞれの専門に基づいた患者インタビューやケアプラン作成のためのディスカッションが展開されていたとのコメントがあったことから、「多領域の相互理解」や「患者や地域の理解と課題解決の検討」については、前年度以上の学びがあったと思われた。しかしながら、学生同士の葛藤やコンフリクトは、それほど観察されずチーム内の合意形成の深さについては、課題が残るものとなった。その一方で、4大学の学生が自らの専門を活かした議論だけでなく、ひとりの人間として終末期患者の気持ちに寄り添う意見を表出できたことから、緩和医療領域においても多職種連携の大きな可能性を感じるIPW演習となった。

平成27年度のIPW演習では、IPW実習の模擬的実践としての完成度を高めることを目標とし、さらに、より臨床に近い症例（疾患の検討など）の導入と、合意形成の深さに着目したファシリテートの質の向上を目指す予定である。

【実施概要】
平成25年度参加者：
埼玉医科大学29名、城西大学薬学部薬学科32名
平成26年度参加者：
埼玉県立大学理学療法学科42名、埼玉医科大学17名、日本工業大学生活環境デザイン学科2名、城西大学32名（薬科学科：1名、薬学科：20名、医療栄養学科：11名）

（城西大学　細谷　治）



彩の国連携力育成プロジェクト
IPW演習
（緩和医療学）
埼玉県立大学・埼玉医科大学
城西大学・日本工業大学

「IPW 実習」

彩の国大学連携科目の共同開発・共同開講 04

IPW 実習は、保健医療福祉の現場において、関係する様々な人との直接的な関わりを通じて、利用者・集団・地域の理解と課題解決のプロセス、多領域の相互理解のプロセス、チーム形成のプロセスを体験するとともに、自分の体験を振り返り、自らの課題を見いだすことも目標とした実習である。これまで４大学の学生の混成チームによる実習の試行を３回実施してきた。

○ 平成 24 年度　試行（1 日間）：4 施設・学生 25 名参加

○ 平成 25 年度　試行（4 日間）：5 施設・学生 25 名参加

○ 平成 26 年度　試行（4 日間）：10 施設・学生 60 名参加

- オリエンテーション　8 月 4 日（月）・8 月 22 日（金）
- 現場での実習　8 月 25 日（月）～27 日（水）の 3 日間
- 報告会　8 月 28 日（木）

※ 平成 26 年度より 埼玉県立大学の学生は正規科目として参加。

（4）IPW 実習

IPW 実習は、これまで埼玉県立大学と埼玉医科大学が平成 21 年度より共同開講してきた科目であり、城西大学、日本工業大学が加わることによってそれぞれの学生にどの様な効果があるかを明らかにすることを目的とした施行事業として、平成 24 年度より 3 回にわたって試行事業を実施した。平成 26 年度、埼玉県立大学は正規科目として開講している。

- 平成 24 年度（試行 1）：平成 25 年 2 月、1 日間、4 施設、計 25 名の学生（県立大(5 学科)：12 名、埼玉医大：5 名、城西大：4 名、日工大：4 名）が参加。
- 平成 25 年度（試行 2）：平成 25 年 8 月、4 日間、5 施設、計 25 名の学生（県立大(看護)：8 名、埼玉医大：6 名、城西大：6 名、日工大：5 名）が参加して 4 日間（他にオリエンテーション 1 日間）が参加。
- 平成 26 年度（県立大：正規科目、他 3 大学：試行 3）：平成 26 年 8 月、4 日間、10 施設、計 60 名の学生（県立大(5 学科)：30 名、埼玉医大：8 名、城西大：12 名、日工大：10 名）が参加して 4 日間（他にオリエンテーション 2 日間）が参加。

この実習の目標は、援助を必要とする人、現場で働く保健医療福祉に関わる人々、グループメンバーなどと直接的に人と人が関わるということを通して、①利用者・集団・地域の理解と課題解決のプロセスを体験する、②多領域の相互理解のプロセスを体験する、③チーム形成のプロセスを体験するということである。さらに、毎日の日々の自分の体験を振り返ることを通して自らの課題を見いだすことも目標としている。

3 回の試行事業から、地域基盤型の実習によって、どの大学の学生にとってもそれぞれが目指す専門領域で必要とされる“連携力”の実践的育成に効果的であることが確認された。具体的な成果を以下に示した。

① 従来の 2 大学に加え、生活環境デザイン、薬学、栄養学を目指す学生の参入により、専門背景の違いを超えた連携と協働の必要性を学生、教員ともに意識でき、大学間の教員の連携が進むとともに、本連携の意義について学内理解を深めることができた。

② 日本工業大の学生の参入によって、保健医療福祉の専門職だけの連携教育と比較し、“住まい”を基盤としてより利用者の“生活”を意識したチームの議論展開や“一般（地域住民）”の視点が加わった議論展開ができた。また、使う言葉(特に保健医療福祉領域の共通言語)を共通に理解する、理解のために葛藤し葛藤を乗り越えるというチーム形成のプロセスを丁寧に体験できる可能性を見いだすことができた。

③ 社会のニーズや生活モデルに基づく実習から、医学・薬学・看護・福祉等の領域では、高齢化に向けた地域包括ケアの理解に加え、プロフェッショナリズム教育としての意味があることが明らかになった。

④ 複数回の試行により、4大学教員の地域基盤型IPEにおけるファシリテートの特徴の理解と技能向上が得られた。

⑤ 大学間連携IPW実習の効果的な実施方法（4日間）を明らかにした。

⑥ 現場での専門教育実習以前の低学年においても複数の大学が連携して行う1日間の“間の“導入体験実習”として連携と協働に関する学びがある可能性が示唆された。

⑦ 大学間連携IPW実習が埼玉県立大学において平成26年度から正規科目（現IP演習）化した。他3大学でもカリキュラム改訂等のタイミングにおいて2大学以上での大学間連携IPW実習の正規科目化として位置づける方向で具体的な検討がなされ始めた。

一方、課題としては次の諸点があげられる。

① 学生の教育効果を客観的に表す地域基盤型IPEの評価指標の開発と、更なる教育効果の探索と提示。

② 学生の共通の学びを担保するファシリテータの質を均てん化するために、『大学間連携IPW実習　ファシリテータ　ガイド（仮）』等の作成とこれを用いた実習教育としてのファシリテータのFDを行う必要性。

③ 地域基盤型でIPW実習を実施する上で必要とされる共通の準備教育（県立大学における『ヒューマンケア論』『IPW論』『IPW演習』）の内容の明示と各大学における修得方法の検討。さらに各領域(医学・薬学・福祉)に特徴的な教育内容、カリキュラム全体における位置づけの解明。

④ 埼玉県立大学版地域基盤型IPE/IPWの教育プログラムを確立するためのカリキュラム（彩の国連携科目）開発に関する教育研究。

⑤ 参加学生増員に対応できる協力施設の確保・拡大。

⑥ 大学間連携による継続的な実習運営に向けた事務、財務、施設とのやりとり，謝金等のルールの一般化。

3年度終了し、参加学生への成果を実感しながら、順調に施行事業が進みそれぞれ学内での共通理解も進んでいる。大学間連携IPW実習の正規科目化（本事業終了後の継続実施）とは、最終的にどのような形をもって正規科目化したと考えるかという点での最終形態を4大学で共有することの必要性、その上で、埼玉医科大学、城西大学、日本工業大学の正規科目化の道程を明確にすること、正規科目化の際の実習時期、履修者数等について検討することが必要である。また、大学間連携IPW実習の継続実施や県内の連携校以外の学生の参加に向けて本実習の実施拠点となるセンター機能を持つ組織設置が必要であるかどうかを検討することが課題となっている。

（埼玉医科大学　柴﨑智美）

【IPW 実習参加学生のコメント】

日本工業大学工学部生活環境デザイン学科　4年　村上光明

私は平成25年2月に行われた第1回のIPW実習試行と、それと平成26年の8月に行われた第3回のIPW実習に参加しました。「ユニバーサルデザイン論」という授業の一環として、埼玉県立大学のIP演習（現在のIPW実習）の報告会を見学する機会を得て興味を持ったことと、他の大学の学生が集まる新しい取組であり、私も身を投じてみたいと思ったのが参加の動機です。

他分野の学生との実習では、初めはお互いに遠慮してしまうことや、専門性が違うので言葉の意味が伝わらないことなど、意見交換がうまくいかないこともありましたが、日を追うごとに話し合いが活発になり、お互いの専門性を理解することで補足の説明を入れることや、伝わりやすいように、質問しやすい雰囲気をつくることができ、最終的には、それぞれの学生が自分の専門性を発揮することができたと思います。

その中で私は建築系の学生として参加したのですが、医療や福祉についての知識が乏しく、病気の症状や、薬の効果で分からないことが多く、自分の専門性を発揮するというよりは、話し合いについていくことで精いっぱいといった状況でした。ですが、医療や福祉に詳しくない一般の目線で質問することや、内容を分かりやすく伝えてもらうことで全員が同じ理解で話し合いを進めることができたと思います。

建築の目線からは、対象者の生活や在宅復帰するためには、どのような設備が必要かなど、対象者のその後の暮らしについて発言することができたので、専門性が発揮できたのではないかと思います。

私はIPW実習に参加したことで建築以外の目線を知ることができたので、視野の広がるよい経験ができたと思っております。

（日本工業大学での学内報告会における口頭発表より）

「連携を語る」

城西大学薬学部薬科学科　2年(当時)　田村麻衣

楽しいだけの実習ではないけれど

「私にとって、IPW実習は自分自身の無力さを知ったり現実を突きつけられたりと楽しいだけの実習ではありませんでしたが、自分自身を見つめなおす良いきっかけになった有意義な4日間でした」　そう語ってくれたのは、城西大学薬学部薬科学科の田村麻衣さんです。

保健、医療、福祉、建築など様々な分野の学生が共に課題に取り組む『IPW実習』。この経験を一つのきっかけとして専門職連携に興味をもち、その後の『彩の国連携力育成プロジェクト』の取組にも参加する学生さんはたくさんいます。田村さんもその一人。平成26年8月に行われたIPW実習に参加した後、外部講師を招いた専門職連携に関する講演会や、4大学連携ワークショップにも積極的に参加しています。

8月のIPW実習の時のことを尋ねると、いつものにこやかな表情はそのままに、しかし、非常に率直な感想も。実習の中での様々な体験を経て、田村さんが得た“きっかけ”について、お話をうかがいました。

薬科学科の学生として

そもそも、田村さんが学ぶ「薬科学科」という学科は、どのようなことを学ぶ学科なのでしょうか？「薬科学科とは薬学を基盤として、薬・化粧品・機能性食品など我々に身近なものを題材に、消費者の目線に立って研究開発を行うことができるスペシャリストを育てる学科です」医薬品のみならず、化粧品、食品など、薬科学が関わる商品は、私たちの生活の中にあふれています。題材は実に様々ですが、こうした商品に対して、“消費者の目線に立つ”分野で学ぶ田村さんだからこそ、実習を通して感じることがあったようです。「最も強く感じたことは、自分たちが学んでいる医療という分野は、大切な存在ではあるけれど対象者の生活の一部でしかなく、対象者の人生をより良いものにするためには、専門職連携や社会資源の活用が必要であるということです」

田村さんの語りからは、一人の対象者に対して、医療という一面だけでなく、生活をより良いものにするという「ケア」のもつ重要な目的と、そのための不可欠な手段として専門職連携や社会資源の活用があるという気づきがうかがわれます。

IPW実習で得られるもの

IPW実習には、チーム形成という側面からも学ぶことがあったようです。

「様々な学部の人と話すことで、自分に求められている専門領域や自分自身の強み・弱みを知ることができる有効なチャンスだと気が付きました。そして、薬科学科の目標である自分の好きな分野を突き詰めて社会に貢献する人材を育てるということを実践するために“求められるもの”“自分と違う考え方を知ること・受け入れること”“現場の声を

知ること”などが必要であると思います。そういう点においてもこの実習で得られるものは大きいと思います」

勇気をもって

薬科学生だからこそ、知ってほしい、見てほしい、体験してほしい実習です、と田村さんはIPW実習を語ります。「自分の知らない世界に一歩踏み出すことは勇気がいると思いますが、その一歩で見える景色はおおきくかわります」この実習への参加に限らず、様々な領域の人とつながり、共に歩む世界の景色は、きっと今とは違うはずです。専門職連携を通して、新たな一歩を踏み出してみませんか？

（Saipe ホームページより）

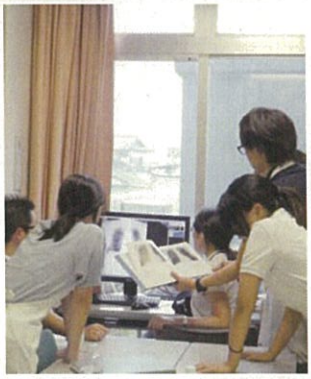
「連携を語る」

埼玉医科大学医学部医学科　3年(当時)　神山雄基

埼玉医科大学入学前、受験生だった頃から専門職連携教育に興味を持っていたという神山さん。学業、課外活動などに積極的に取り組みながら、これまでに2度行われたIPW実習の施行事業の両方に参加しています。「2回目の時の利用者さんの病気は、まだ授業でやっていなかったので、分からないなりに調べました。医学生がわからないことは、他の学部の人はもっとわからない。他の学部の人との知識の差を埋めて一緒にやっていくために、どういう風に努力すればいいのか。これから勉強しなきゃいけないなと思いました」

IPW実習に参加するのは、保健医療福祉分野の学生ばかりではありません。分野外の人たちに医学を分かりやすく説明することは、医師の専門性、得意分野だと語る神山さん。こうした“専門性”を意識するとともに、実習中には“普通に生活している人としてどう考えるか”ということにも注意を払っていたのだそうです。

「利用者さんとの距離感も大事だけれど、チーム内での距離感も大事だなと思います」

社会の中で一緒に活動する中でも、職種の別はきちんとある。お互いを尊重するためにも、適度な距離感が必要—“チーム形成のための確かな実践的ノウハウ”が、IPW実習の経験を通して語られました。

（Saipe ニュースレターより）